

矩を踰えず。

と告白してゐる。安藤省庵曰く、

人生劈頭、一個の事あり、立志、これなり。

と、これ何人も異存のない所であらう。

或ひは、いふ者があるかも知れぬ。

「志は、誰れでも立てる。能く、成就する者は少い。成就しない志ならば、寧ろ、立てない方がよい。」——こんなことをいふ者もあらうが、到底、詭辨の甚だしいものである。

志が成就しないのは、その罪、人に在つて、志にはない。朱子の解に

心の之く所、これを志と謂ふ。

とある。「志」と「之」とは音が同じ、意味も、同じである。心の之く所、向ふ所が、志である。而も、それは、確かに向ふのでなければならぬ。一時の氣まぐれではなく、長く、一方へ向つてゐるのでなければならぬ。それでこそ、眞の志であり。又た、成就もある。世人の志には、一寸、立て、見る、といった

やうなのが多い。絶えず、方向變換をやつてゐる、これ、志の成就しない、第一の原因である。

既に、志を立てた上は、相當の手段を盡し、努力を加へなければならぬ、折角、立派な志を立てながら、たゞ、立て放しにして置く者が、十中の八九に在る、志の成就しない第二の原因は、こゝに在る。志の罪ではない、罪は、人に在る。

念々、こゝに在りて、これを爲して厭はず。

といふ風にしない人に在る。

勿論、不如意勝ちな人生である、天災地變、その他、據らない事情の爲めに、あたら、志を水の泡にすることもある。が、その間にも、志の利益はある。決して、水の泡にしたわけではない、ふいになつたわけではない。

前いふ通り、志は、心の向ふ所である。志が、確かに、一方に向つてゐれば、他方には向はない。悪い者では、勿論困るが、善い志し、例へば、仁義、道徳に向つてゐる、といふやうならば、自分の周圍に、種々の誘惑物が、堆積して

るても、それには目もくれず、その前を、さつさと、素通りすることが出来る。即ち、志は、縦し、成就と迄行かなくとも、たゞ、志を立てたばかりで、既に、誘惑に罹らないといふ、大利益があるのである。

而も、そのみではない。孔子は「志に志せば、悪まるゝことなし。」といつてゐる。仁は、差し當り、物を愛することである。韓退之も、

博く愛する、これを仁と謂ふ。

といつてゐる。この仁に志せば、心が寛大になり、人に對して、手厚くなり、情け深くなつて、世間から憎まれるやうな事をしなくなる。仁に志して、その者を成就し得れば、その人は、聖人である。賢人どころではない。君子どころではない。仁徳の成就は、談、容易ではないが、單に、仁に志すだけでもよい。その間は、尙ほ且つ、これ程の利益がある。

であるから、志は、大切である。是非、志を立てなければならぬが、同じ立てる者ならば、なるべく高尚に、なるべく立派に立てること、これ肝要である。一旦、志を立てた上は、「念々、こゝに在りて、これを爲して厭はず。」で、手段を

盡し、努力を加へ、これを成就させることに勉めるのは、當然の義であるが、萬々一、成就に至らなくともよい。その者は、無駄にはならぬ。成否は、これを天に任せて、たゞ、志を立て、たゞ、勉強するを、最良の策とする。

二二三 木揚利兵衛仁義禮智信

◇聞けや人、忠とあしたに、雀子の、孝と夕に、鴉鳴くなり「古歌」

享保の頃、江戸に、木揚利兵衛船の荷物を陸へ掲げること、これを木揚といふ。利兵衛の生業が、それであつたので、以て、姓としたのである。一といふがあつた。幼時仕へた舊主人の家が、見る陰もなく衰へ果て、年九十ばかり老婆が、たゞ一人、頼むよすがもなくしてゐたのを、引き取つて養ふさへあるに、自分の不在中、妻の仕へ方が、若しや、粗末ではあるまいかと、夜が明けると直ぐ、仕事先へ負つて行つて、物を敷いて坐らせ置き、自分の食物を別けて養ふなど、何か

ら何迄、行き届いた世話をした。

この事が官に聞えりと、官は、これを賞して、賞を賜はつた。世間でも、廣くいひ傳へたので、江戸のみでなく、京都邊でも、利兵衛の姿を繪に作り、忠義の行狀を詳しく記して、

「木揚利兵衛、仁義禮智信……」など呼びながら、賣り歩く者があつた。

忠孝は、殆んど、人の姓である。何人も、或る程度迄は、忠臣であり、或る程度迄は、孝子である。それが、「或る程度迄」に止まつて、何から何迄行き届く、といふ風に行かないのは、何故か。勉強が足りないのか。勉強してする忠孝は、長持ちしない。一時は、行き届いても、長い月日の間には、何時しか、弛みが出て來る。附焼刃の忠孝は、餘りあり難いものではない。

それは、勉強が足りないのではない。誠が足りないのである。至情が足りないのである。親のその子に對する心持ちは、全然これ誠、全然これ至情である。左ればこそ行き届く。誠を以て、至情を以てする忠孝でなければ、變らずに、弛

まずに、何から何迄行き届くといふわけには行かない。

木揚利兵衛の忠孝は、正しく、それであつた。それであつて、何っして、あれ迄に勤められやう？

江戸は勿論、遠く、上方邊迄も、利兵衛の姿を繪に作り、その行狀を詳記して賣り歩いたといふ。今は、新聞紙といふ、便利な機關があつて、世間に忠臣、孝子があれば、その肖像を掲げ、その平生を書き立て、早速、一般へ報道する。當時の人が、當時の忠臣利兵衛に對すると、今日の人が、今日の忠臣、孝子に對すると、その感情に於て、思慕の程度に於て、若干、冷烈、深淺の差がありはせぬか。或る人曰く、

「忠孝なんてことは、今の世に流行らない。」と。何といふ言葉であらう？ 世道の頽廢、人心の墮落、何とも、嘆息の外はないが、而も、嘆息して已むべきではない。

二の四 鮭延主従の親み

◇主と臣と同じきは昌へ、主と臣と同じからざるは亡ぶ。「三略」

最上義光の長臣鮭延越前は、祿一萬二千石を食んでゐたが、一朝、最上家が滅びると、忽ち、天涯流落の身となつた。けれど、平生、家人に慈悲深くあつたので、二十人の士は、主人を見捨てかね、

『各自、乞食して養はう』と誓ひ、どこどこ迄もと、これに付き従つた。

後ち、越前は、土井大炊頭利勝に召し抱へられて、五千石を給せられた。乃はち、二十人に二百五十石づつ、分け與へ、その身は、二十人の許に、一日替りに養はれて、一生涯を終つた。

越前の死後、二十人して、一寺を下總の古河に建立し、亡主の菩提を弔つた。鮭延寺、即ちちそれである。

主人のその家來を視るは、子の如くである。家來のその主人を視るは、父の如くである。名は、君臣ながら、實は父子に異ならぬ。

これ、鮭延主従の事である。

這般の親み、這般の情愛は、どこから生ずるか。君臣の交はりは、常に、斯くの如くでなければならぬが、斯くの如くなる君臣は、古來、その例が少い。君といひ、臣といふ。主といふ、従といふ。元を糺せば、赤の他人である。そこに、親みのあるは、いふ迄もないが、又た、水臭い所もあつて、素より、父子のやうには行かない。然るに、鮭延主従の親みは、父子も同然、或ひは、同然以上である。斯うした親み、斯うした情愛は、何に由來するか。これ、人の長たり、主人たる者の、篤と、考慮すべき大問題である。

然り、大問題である。この點に於て、能く成功し得た主人でなければ、農、工、商、何種の事業を經營しても、到底、成就の見込みはない。まことに、これ、大問題である。

大問題ではあるが、難問題ではない。主人のその家來を視ること、子の如くであつたればこそ、家來のその主人を視ることも、親の如くであつたのである。これを少しも思はずして、平生家來をこき使ひ、尙ほ且つ、これに忠誠を要求する主人は、乞ふ、次の歌を讀め。

善し惡しの、うつる鏡の、影法師、よくよく見れば、我が姿なり。
但し、斯くいふのは、主人の爲めにいふのである。家來の爲めには、別にいふべきものがあり、示すべき歌がある。歌に、

身に負へる、科は思はで、主と親、そしる人こそ、うたてかりけれ。

二の五等分に混ぜた茶と珈琲

◇智者の一失、愚者の一得。『日本俚諺』

宿屋の婆さん、しつかり者だけに、意地も悪い、泊つた客に、

「明朝の御飯には、お茶を喫りますか。珈琲にいたしませうか。」と、尋ねると、折柄、客は、切りに、手紙を書いてるて、婆さんの言葉が耳に入らぬ様子。重ねて、

「お茶を喫りますか……それとも、珈琲を? ……何方にいたしませう? ……實は、準備の都合がありますので……ちや、お茶にいたしませうか。」

客は、手にした筆を投げ出して、

「煩さいねえ、茶が何うしたといふのだ?」

「いえ、明朝、お茶を喫りますか、珈琲が宜しいか、それをお尋ね申しますので……」

客は、不興げに、顔を澁めて、

「何だ、下らない。何方でもいいよ、兩方でもいいよ。」

「はいはい、と引き下つた婆さんが、明朝、汲んで出したのを、一口、飲んで見て、

「これは、何だ? 飲めやしない。」客がいふと、

「はい、御注文の両方ですよ。茶と珈琲とを、等分に混ぜましたので……」と澄
したものを。

茶には、茶の特色があり。珈琲には、珈琲の特色がある。各自、有する所の特
色に満足して、多きを望まず、その特色に於て、風味すれば、茶も結構、珈琲も
結構、申分はない筈、これに申分を挟んで、兩者の特色を、同時に、併せ味は
うとすれば、飲めないものが出来てしまふ。

人間の事が、やはり、然うである。所謂、
十人十色。「日本俚諺」

なるもので、人毎に、それぞれ、その特色を持つてゐる。思慮の深い者もあれ
ば、勇氣に富んだ者もある。沈着な者もあれば、敏捷な者もある。細心な者もあ
れば、大膽な者もある。數理に長じた者もあれば、詩文に優れた者もある。辯舌
の達者な者もあれば、手藝を得意とする者もある。「十人十色」「百人百色」、一様で
はない。茶には、茶の特色があり、珈琲には、珈琲の特色があり、柳の緑、花の

紅、それぞれ、その特色がある如く、人も、人毎に、それぞれ、その特色があ
る。

人を見、人を評する者は、その特色に満足して、多くを望まないのをよしとす
る。思慮の深い者は、若干、勇氣に缺ける所があり。沈着な者は、幾分、敏捷の
點に遺憾がある。古人の所謂る。

天、二物を與へず。

で、それは、已むを得ないことであるが、思慮の深い者に、更に、勇氣に富ま
んことを望み、沈着な者に、併せて、敏捷ならんことを望み、望み通りに行かな
いのを見て、

「あの男は、駄目だ。」とばかり、捨て、顧みないのは、間違つてゐる。備はらん
ことを一人に望むのは、由來、智者のしない所である。

萬一、望み通りに行つたら、何んなものか。人には、特色といふがなくなつて
しまふ。「十人十色」が、十人一色になつてしまふ。その單調さは、人をして、倦
怠を感じしむるに充分である。宜しく、茶と珈琲とを等分に混じた飲料が、飲料

として、無價値のものであることを顧み、人毎に有する一つの特色を以て満足すべきである。

一一の六 四種の忍耐

◇一忍、以て、百勇を及ぶべき、一靜、以て、百動を制すべし。「蘇老泉」

「佛、迦毘羅衛國に、在りしとき、差摩竭、佛に問うて言く、菩薩は、何を行ぜば、疾に、無上正眞道を得て、三十二相を具へ、臨終の時に至りて、心亂れず、八難處に墮ちず、一切の法に於て、無礙なるを得るや。」

佛、答ふらく、菩薩の行は、忍耐を本と爲す。忍耐に四種あり。一には、罵詈を受くるも、黙して報ひす。二には、搦搦るも、恨みす。三には、瞋恚のものあるも、慈を以て迎ふ。四には、輕り毀るものあるも、其の惡を念はず。「菩薩生死經」

X X X

忍耐の必要なこと、その美德であることは、特にいふ迄もない。古人は、

たゞ忍べ、人たる道の、忍ぶ草、忍ぶ外に、道あらやも。

と迄、極言してゐるが、さて、忍ぶにも、色々ある。人に罵詈されたり、打たれたり、怒つて出られたり、輕り毀られたりして、癢に障る。腹が立つて堪らない。むらむらとなつて來る時、

「否、待て。今、怒るのは、不利益だ。先づ、黙つてゐやう。然し、何時かは、敵を討つてやるから。」と、齒を喰ひ締つて、じつと我慢するのは、まだまだ、至つたものではない。内心、怒りを藏して、表面、平靜を装ふのは、自ら欺くものともいへやう。護謨毬を壓へれば、一段と、反撥力を加へる。怒りを壓へるのも同様の結果に終る。寧ろ、怒りの根本を抜いて、罵言されても、乃至、輕り毀られても、何等の感じの起らないやう、修養の功を積むに如かぬ。

それは、無我の修養である。罵詈されて怒り、輕り毀られて立腹するのは、「我れ」があるからである。莊子の所謂、

天地は、一指なり、萬物は、一馬なり。

で、萬物一體我れなく、彼れなく、彼れを我れとし、我れを彼れとし、彼我を併せて、平等一如の一法海中に還没してしまへば、誰れが罵詈雑言して、誰れが怒るか。立腹しやうにも、相手がない。相手があるのは、我れがあるからである。腹が立つのは、有我、我執の致す所である。無我になれば、罵詈雑言されても、何等の感じがない。輕り毀られても、怒るに及ばぬ。従つて、特に、怒りを壓へる必要もなく。損得などを考へて、じつと忍ぶにも當らない。

これ忍ばずして、忍ぶのである。忍耐の至つたものは、これである。

二二の七 上杉謙信必死の覺悟

◇山川の、末に流るゝ、椽がらも、みを捨て、こそ、浮ぶ瀬はあれ。「古歌」

河中島の戦ひに、上杉謙信は、單騎、敵將武田信玄の牙營に迫つて、「流星光底長蛇を逸す」の壯快事を演じた。

主將として、餘りに輕々しいやうであるが、謙信には、時々、この種の思ひ切つた行動があつた。永祿四年、武藏の忍城を攻めた時など、彈丸、雨と降り濺ぐ陣頭に立つて、平然としてゐた。やがて、馬首を回さうとすると、城中に聲があつて、

「敵に背ろを見せられるか。卑怯！ 卑怯！」

と呼んだ。謙信は、再び、敵に面して立つた。敵は、銃先を攢めて、謙信を亂射したが、一丸も、中らなかつた。謙信は、

「もうよからう？」といつた風で、笑ひながら、他方へ向つた。

後で、老臣宇佐美良勝が、

「大切な御身を以て、餘りに御輕卒ではござりませぬか。」と諫めると、謙信の曰くに、

「生を必する者は死ぬ、死を必する者は生きる。要は、心志の如何に在る。この心を得て、堅く守持する者は、火に入つても焼けぬ。水に入つても溺れぬ。死生に關はるものではない。自分は、この理を明かにして、三昧に入つてゐる。生を

惜しみ、死を厭ふのは、まだまだ、武人の心膽ではない。」とあつた。
蓋し、謙信は、益翁宗謙禪師に参じて、略ぼ、禪の宗趣を得てゐた。不識庵と
號したのも、蓋し、不識の公案に基づくといふ。

人、動もすれば、天命といふ。火事に出遇つたり、商賣に失敗したりすると、
「天命だ、仕方がない。」といふ。果して天命か、將た、人事か。天命の禍ひであ
るか、人の自ら招いた禍ひであるかは、一寸、判定に苦しむ。火の元を粗漏にし
たが爲めの火事、一攫千金を夢みて、相場事に手を出したが爲めの失敗は、天命
ではない。孔子の語に、

人事を盡して天命を待つ。

とある如く、注意に注意を加へ、用心に用心を重ね、

戦々兢々として、薄氷を履むが如く、深淵に臨むが如し、「詩經」

があつて、尙ほ且つ、免れ得ない禍ひならば、それは、天命、致し方がない。
諦めるの外はないが、世人の所謂る天命は、大部分、人事である。用心次第、免

れられる禍ひをも、天命に歸してゐる。天こそ、迷惑千萬である。

であるから、孟子は、

「命を知る者は、巖牆の下に立たず。」といつてゐる。人事を盡さずして得た禍
ひを、天命とするのは、「眞に、天命を知らないのである。眞に、天命を知る者は
人事を盡すのに、十二分の注意を拂ひ、軽々しく、危険を冒すなどの暴舉に出
ない。

「軽々しく、危険を冒すのは、天命を知らない者の事であるが、人間、「用心深く」
して、而も、危険を冒さなければならぬ場合がある。「戦々兢々、薄氷を履むが如
く、深淵に臨むが如し」といふけれど、徒らに、怯れ恐れ、逃げ惑ふのは、これ
亦た、天命を知らない者の事である。何としても、避けることの出来ない危険は
これを冒すの外はない。これ、却つて、天命を知るのである。戰場へ出ては、敵
の砲火に身を曝しつゝ、敵陣目がけて、突撃する場合もある。それは、己むを得
ない冒険である。己むを得ない所に従ふのは、即ち、自然に従ふので、自然に従
ふのは、取りも直さず、天命に従ふのである。天命と自然と、名は違ふが、實は

同じものである。逃げ隠れるこそ、自然に背くもの、天命を知らないものである。要は、如何なる場合にも、『用心深く』の心得を失はないに在る。

既に、己むを得ない冒険である。いはゞ、天命の冒険である。爲めに、禍ひに罹つた所で、それこそ天命の禍ひ、避けるに道のないものである。避けるに道のない禍ひを、何とか避けやう、免れやうと、逃げ隠れるのは、決して、用心深いのではない。それは、卑怯である。臆病である。天命を知らないものである。寧ろ、禍福を外にし、死生を忘れた、敢然、危険を冒すべきである。死ぬる覺悟で慕進すべきである。弘安の役に、北條時宗が、戦地に赴かんとして、佛光禪師に諷すると、禪師は、

「慕直に進前せよ」との一語を以て、これに示したといふ。己むを得ない冒険に方つては、たゞ、慕進の一途があるのである。

而も、斯くの如くにして、危険を冒するのが、この場合に於ける、最も安全の策である。禍福を外にして慕進する者、却つて、禍ひを免れ、禍福を慮つて躊躇する者、反對に、禍ひに罹り。死生を忘れて進前する者、多くは死せず、死生を憂

へて、猶豫する者、常に、命を失ふ。謙信の所謂る。

死を必する者は生き、生を必する者は死す。

とは、この事である。西人の曰くにも、

勇の中には、安全がある。「エマーソン」

といひ、

猶豫は、危険なる最後を有する。「シエークスピア」

といふ。亦た、この事である。

この際、困難とするのは、禍福を外にすることである。死生を忘れることである。これ、區々たる思慮、分別、利功、才覚などの能くし得る所ではない。勝海舟いへるあり、

宜しく、身を困窮に投じ、實才を死生の際に磨くべきのみ。

と、眞に然り！ 眞に然り！

一二の八山岡鐵舟の大言

◇面白の利慾や、理義の道、塞がらぬ程。「小早川隆景」

江戸開城の際、海江田信義が、城内の府庫を調べると、在金が、意外に少い。立會の山岡鐵舟を顧みて、

「もつとある筈ぢやが……」と咎めると、鐵舟は、些か、癩に障つた様子で、「金の事など、江戸の武士が知るものか。」と、痛烈に答へた。海江田も、大に赤面した。

西郷南洲も、この鐵舟には、感心してゐた。明治元年三月、南洲は、總督宮參謀として、駿府へ入つた。そこへ、勝海舟の命を帯びた鐵舟が、やつて来て、寛大の虚置を乞うた。南洲は、その時の鐵舟を語つて、

「山岡といふ男は、念頭に、敵味方の思ひがないらしい。いきなり、静岡の本營へ飛び込んで来たから、敵の中を、江戸からこゝ迄、何うして来た？」と尋ねると、「歩いて来た。」といふ。では、「敵を見なんだか。」と訊くと、「澤山の兵士が、行列などをしてゐて、立派に見えた。」と答へて、洒然としてゐた。まあ、始末に困る男さね。」といつた。

蓋し、鐵舟は、額程、禪の修行を積んでゐたのである。

昔の武人、必らずしも、金を卑しんだわけではない。寧ろ、質素、儉約に身を
持つて、精々、金を貯はへるのが、武人の嗜みであつたのである。金がなくて、
馬一匹、飼ふことも出来ない。家來を養ふことも出来ない。武器を調へることも
出来ない。何も彼も、「出来ない」盡しでは、一朝、事のあつた場合、何うする事
も、やはり出来ない。武人の典型加藤清正も、

衣類の事、木綿、つむぎの類たるべし。

衣類に金銀を費し、手前ならざる旨申者、曲事たる可く候。不斷、身の上相
應に、武器を嗜み、人を扶持す可く、軍用の時は、金銀を使ふ可き事。

と、家人等を戒しめてゐる。武人は、金を卑しんだものと、一概に決めてしまふのは、大間違ひの骨頂である。

が、金を貴び、貯蓄を事とする者には、得て「不斷、身の上相應に武具を嗜み人を扶持すべく、軍用の時は、金銀を使ふ可き事」といふ、貯蓄の目的を忘れ、貯蓄そのものを目的とするの弊がある。名けて、吝嗇といふ。吝嗇は、節儉の似て非なるものである。昔の武人にも、吝嗇漢があつた。今の貯蓄家は、大部分、吝嗇漢である。

貝原益軒曰く、

身に奉ずること薄きを節儉とし、人に施すこと薄きを吝嗇とす。

と、吝嗇漢は、已れに奉ずることも薄い。極めて薄い、節儉の人が薄いのは又た、一段である。

爪に火を灯す。「日本俚諺」

といふやうなことをする。爪に火を灯せば、蠟燭の費えは、省けやう。其代り體を損ずる。體以上に蠟燭を貴び、命以上に、金をあり難がり、金の爲めには、

親を忘れ、子を忘れ、夫婦、兄弟、相忘るゝのが、吝嗇漢の常である。

況して、他人を忘れ、他人に奉ずるの薄いことは勿論である。彼れには、義理もない、情けもない。人の心中に在つて、最も貴いものなる社會的感情は、彼れに、その痕迹をだも止めない。

これは、吝嗇漢の事である。吝嗇の程度に至らない者も、金の爲めには、左右道を忘れ勝ちである。世間の人が、互ひに、争ひ合ひ、憎み合ひ、怨み合ひ、妬み合ふのも、原因の大部分は、金に在る。まことに、

金が敵。「日本俚諺」

の世の中である。金は、腐敗の原因である。金は、墮落の根本である。

殊に、武人として、金を愛し、金に目が暗めば、武人の武人たる所以、身家を後にして、家國を先にすべき、犠牲、献身の大義も、廢れなければならぬ。これ武人らしい武人が、往々、金を汚物視し、金に手を觸れることをさへ、屑しとなかつた理由である。

けれど、それは、金が悪いのではない。金に對する心術が悪いのである。態度

が悪いのである。金に囚はれず、執着せず、

用を節して、人を愛す。「孔子」

の心がけがあつての貯蓄ならば、何の、貯蓄が悪からう？ 腹が空つては、軍は出来ぬ。金がなくては、慈善も出来ぬ。古人が、貯蓄を奨励したわけである。

一一の九 たつた一つの鶏卵

◇郭索として足多きの蟹ありと雖も、足なきの蜆に如かざるは、その心を用ふるの一ならざるを以てなり。「苑叔明」

命よりも金が惜しい、といふ男、病氣に罹つて、已むなく、醫者に診せると、

「薬は要らない。滋養物を攝つて、體を強健にすれば、忽ち癒る。それには、鶏卵が、いゝだらう。」とのことに、早速、鶏卵を買つて飲んだ。

四五日経つて、醫者が再び、容體を診ると、少しも、快くなつてゐない。不思議

議に思つて、

「鶏卵は飲んだかね？」

「はい、飲みました。」

「毎日、幾つ位るづつ飲んだね？」

「毎日、幾つ？……そんなに飲むものですか。過日、お言葉に従つて、早速、一

つだけ、飲みましたが、一向、効能がないやうです。」といふと、醫者は呆れて、

「何程、よく効く鶏卵でも、たつた一つで、何う、驗しが見えるものか。毎日、

七八つは飲まなきや駄目だ。」

病人のいふことが變つてゐる。

「鶏が卵を産むやうに、容易く、金は出来ませんからね。」

X X X

薬や滋養物の効能は、たゞ、長く持續することに因つてのみ顯はれる。如何なる

靈薬も、一服だけでは、覺束ない。如何によく効く、鶏卵、鶉の卵でも、たつ

た、一つで健康は恢復されない。

萬事、これである。勉強は、成功の基である。たゞ一日の勉強が、何にならう。節儉は、致富の要道である。たゞ一日の節儉から、岩崎、三井の富は生れぬ精神を修養して、人らしき人となる、といふが如き大事業は、尙更の事で、一日の讀書、一日の工夫に、何程の效能があらう？ それこそ、

死して後ち已む。「孔子」

の覺悟があり、久しきに亙つて、不斷に修省し、一心に工夫してのみ、能く、その目的を達成することが出来る。前に所謂、持續である。

所が、持續といふこと、易きに似て、實は難い。大概、中折れがする。途中迄行つて、止してしまふ。斯くて「九仞の切を一簣に缺く」(論語)のは、可憐らしの至りである。

殊に、己れの力量に誇りを感じ、才智に恃みを繋げる者には、てんで、持續といふ考へがない。一日の畫策、以て、萬金を獲んことを欲し、一日の努力、以て巨富を成さんことを望む。而も、兎の、龜に如かず、「郭索として足多きの蟹」の仕事の、「足なきの蚓」に劣るのを見れば、その失敗に終ること、異とするに足らぬ。

二の二〇 鏡に哭く人怒る人

◇江に寫る、かけ愛するも、憎むのも、固は立ち寄る、その身にぞよる。

「手島堵庵」

「蘇深谷の中に、村あり、其の民、未だ嘗つて、鏡あることを知らず、好事者あり。天玻黎を齎らして往き、戸々、之れを示さんと欲す。一戸に致る。其の主翁、兄と友愛篤摯、而して、兄、新たに歿す。乃はち、己れの影を鑑視し、以爲らく兄の靈、形に現はるゝなりと、鏡を擁して、大に哭し、絮語、縷々として止まず。鏡の主、大に笑ひ、急に鏡を取りて走り、又た、一戸に致る。其の主、強暴なる壯夫、兄と相仇視し、往來を絶つ。亦た、一鑑して、以爲らく、兄至ると大に怒り、戟手、之れに向へば、則はち、鏡中の影、亦た戟す。益々怒り、力を

極めて、一撃すれば、鏡、立ろに片碎す。嗚呼、亦た愚なり。抑も、茫々たる天地は、天鏡なり赤羅萬象は、一影子なり。則ち、人の世に處し、物に接する恩讎、順逆、親疎、從違、千鏡、萬界、目前に現はる、者、豈に、吾が心身の影子に非ずや。然り、而して、恩を喜び、讎を怒り、順を樂しみ、逆を憂ひ、親を愛し、疎を憎み、從を好み、違を惡み、心身、惱亂して、底止する所なし。岐蘇村民の愚に非ずして何ぞや、何を以て、其の愚を免れん。曰く、身に反りみて心身を求むるのみ。(山田方谷)

× × ×

鏡は無心、森羅たる萬象、花たると、鳥たると、人たると、物たると、凡そ、我が前に來ることがあれば、さながらに、これを寫して、少しも、私を交へないが、人は、なかなか、然うは行かない。人、殊に小人には、私心、私慾がある從つて、判斷を誤まつて、好む所は、惡人も、これを善人とし、憎む所は、善人も、これを惡人とする。

大學にも、

好んで、その惡を知り、惡んで、その美を知る者は、天下に鮮し。

と見えてゐる。譬へば、曇つた鏡の、如實に物を寫さないのと一般である。私心、私慾は、心の曇りである。この曇りを一掃し得た、無私、無慾の君子のみが正しく、人を見、人を寫すこと、明鏡の如くなるを得るのである。

が、私心、私慾の小人も——寧ろ、私心、私慾の小人であるだけに、人の已れに對する心情を感得し、看破するの明は、却つて、君子に勝るものがある。人の思惑に頓着するのは、小人の常である。

『あの人は、自分を何と思つてゐるだらう?』といふやうなことばかりを問題にする。そして、忽ち、それを看取つて、これに酬ひんとする。

この意味に於て、小人の心も、亦た、明煌々たる鏡である。此方が、好意を持つて向へば、先方も、好意を持つて迎へる。此方が、惡意を持つて向へば、先方も、惡意を持つて迎へる。愛を以てすれば、愛を以て應じ、憎を以てすれば、憎を以て應じる。笑へば笑ひ、怒れば怒り、毀れば毀り、譽めれば譽め、動もすれば、

賣り言葉に買ひ言葉、「日本俚諺」

の喧嘩となる。此方の心情が、直ちに、先方の心情になることは、響きの聲に
應じ、陰の形に従ふが如くである。これを鏡に譬へて、恐らく、誤まらないであ
らう。

世間、小人ならぬ者はない。人と交はつて、その好意を要求し、親切を希望す
る者は、已れ、先づ、これに好意を寄せ、親切を盡すべきである。平生、冷淡を
事として、困る時ばかり、

「この場合、君の好意に依る外はない。何分、頼む、いや、家内も、君の親切に
は、深く、感謝してよ。」などと、世辭だらだら、

苦しい時の神頼み、「日本俚諺」

をしたとて、先方にも、虫がある。到底、いむとはいはないであらう。

尤も、馬鹿は、別である。聖人、君子も、別である。聖人には、私心がない。
君子には、私慾がない。編なく、萬人を愛して、敵にも及ぶ。神の完きが如くに
完くして、何人の上にも、雨を降らし、日を照らし、少しも、愛憎せぬ。これを

鏡に取つていへば、君子の心は、公に明かで、私に暗い鏡である。小人の心
は、公に暗くて、私に明かなる鏡である。

二二の二 甲斐の徳本貪らず

◇欲を除くは、一念の微に在り。「春日潜庵」

徳本は永田氏、薬箱を肩に、伊豆、武藏の間を廻り、

「甲斐の徳本、一服十六文！」と呼びながら、賣て歩いた。江戸に在つた時、將
軍が病氣で、典醫等が、手を盡しても、效驗がないのを、誰れが申し上げたのか
徳本を召して、治療の事に當らせられると、間もなく、全快せられた。將軍は勿
論、有司等も、非常な喜びで、種々、賞賜の品があつたけれど、徳本は、一切受
けず。

「手前の薬は、一服、十六文でござる。その勘定で、お拂ひ下されば宜しい。」と

のみ答へた。役人一同、その潔白に驚いた。

この事、將軍にも聞えたのか、

「所望があらば、何なりと申せ。」と、頻りに、命があつた。徳本は、

「それ程、仰せ下さるなら、手前の友だちに、家のないのを悲しんでゐる者かございませう。それへ、家を賜はれば、手前へ賜はつたも同然でございませう。何卒その邊で……」との所望に、然らばと、甲斐の國山梨郡の地に、金を添へて、下し置かれた。

徳本は、早速、友人を呼んで、賜ものを取らせ、その身は、相變らず、葉を賣り歩き、行方知れずになつた。甲斐の屋敷は「徳本屋敷」といつて、永く、後迄残つた。

徳本の著書に、梅華無盡藏といふがあつて、坂木に上つた。薬方、古へに據らず、頗る、奇であるといふ。薬名も、一家の隱名を用ひた。

何等の無慾！ この老の眼中、將軍と平民との區別がなかつたのも、無慾であ

つたからである。慾があると、金持ちが、あり難くなる。華族が、貴くなる。高位、高官の人が偉く思はれる。

一二の一二横井也有の名言

◇大人は、赤子の心を失はず。「孟子」

俳人も有、横井孫左衛門は、尾張の重臣である。爲人、淳樸、文雅を好み、最も、俳諧に長じて、世に獨立した。常に、その門人に語つて、

「自分には、俳諧の師もなく、又た、門人もない。たゞ、正直な子供が、舌もしどろにいひ出したのが、自然に、五七五にも叶ふぢやらう。」といつた。

松木淡々といふ俳人が、已れを高ぶり、人を侮ることを聞いて、初対面の時、化けものの、正體見たり、枯尾花。

の句があつた。その誠心なことは、大概、この類であつた。

著書、鶉ごころも、浦の梅、野父談などの俳文が、實體で、鼓舞自在、無比であることは、先賢も、己に、これを稱してゐるとか。

「大人は、赤子の心を失はず。」——赤子の心とは、何んな心か。赤子は、無我である。人に對し、物に對する時、心中、ある所は、その對するものばかりで、少しも、私智、私案を用ひない。物と我れとの境がなくなり、兩者を合して、たゞ一體になつてしまふ。

嗒然として、その耦を喪ふに似たり。「莊子」

今者、吾れ、我れを喪ふ。「同」

といつた心持ちである、これが、赤子の心である。

横井也有は、この心持ちを以て、自然に對した。山を見ては、山ばかりになる水を見ては、水ばかりになる。花を見ては、花ばかりになる。鳥を見ては、鳥ばかりになる。斯くして、彼れの俳句はあつたのである。

然し、俳句の事のみではない。山水、花鳥に對するのみではない。君に對し、

親に對しても。亦た同斷で、心中、ある所は、君ばかり、親ばかり、我れはないといふのが、忠臣、孝子の心持ちである。

人に接するにも、その通りである。人と話す時には、人ばかりになる。私智、私案を挾まない、全然、無我の心持ちになる。斯くてこそ、愉快に話が出来る。我れがあり、俺が「の角が出かけると、つひ、相手を突いて見なくなる。高慢な態度を取つたり、馬鹿にしたやうなことをいつたりしたくなる。そろそろ、自分の效能を説き出す。相手に取つて、面白くないこと夥しい。

一二の二三 夫の早飯食ひ

◇苟とに、日に新たにして、日に新たにすれば、又た、日に新たにらん。

「大學」

北天竺から南天竺へ移住して來た男、世話する者のあるに任せて、妻を迎へた

その翌朝、妻が、食事を調べて進めると、急に取つて飲食し、熱くて舌を焼くにも頓着せぬ様子に、妻は、怪しんで、

『天下泰平の今日、何故、そんなに慌て、食事をなさるのです。』と問うた。

『いや、これには、仔細のあることだがお前には明されない。』

「仔細ですつて？……何んな仔細でせう？お隠しなさるのは、水臭いぢやありませんか。」と迫ると、夫は、少時、打ち案じた末に、

『では、話さう。家では、先祖代々、早飯喰ひの習慣がある。だから、その習慣に従ふのだと、大層な仔細を語つて、妻を驚かした。』

X X X

世間の習慣、祖先の遺法と雖も、有害無益のものは、片つ端から、打破してかゝるがよい。斯くてこそ、改善もあり、進歩もあり、發達もあり、向上もある。況して、自分一人の従來の仕來りなどは、それが、非事、曲事である以上、とんどん、改めて行くのでなければならぬ。莊子の傳ふ。所に據ると、孔門の蘧伯玉は、

年六十にして六十化する。

といつた人であつた。向上の志願、改善の努力が、如何に熱烈であつたかを想ふことが出来る。我々も、斯くありたい。

蓋し、舊慣を墨守して、改めることを知らないのは、到底、執着の爲であらう。吾等は、最も、執着を嫌ふ。

一一の一四 世人よく讒舌す

◇群居終日、言、義に互らす。「孔子」

『世の人、相會ふ時、しばらくも、黙止することなし。必らず、言葉あり。その事を聞くに、多くは、無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために、失多く、得少し。これを語る時、たがひの心に、無益の事なりと、いふことを知らず。』(徒然草)

眞實、よく喋べる。而も、有害無益のことを、よく喋べる。厭ふべきで、聖人は、『群居終日、言、義に互らさず。』といふのを、小人の小人たる所以であるとした。無意味の千萬言は、有意味の黙に如かぬ。いふべくんば、

夫の人、いはす。いへば、必らず、中ることあり。「孔子」とある如く、道理に適中したことをいひ、善い事をいつて、聞く者を利するの

でなければならぬ。言語の機能は、天が人間にのみ與へた、特殊の賜ものである。天地間、獨り、人間のみの有する、大切な特權である。天の賜ものを妄用する者は、必らず、天の咎めを受ける。大切な特權は、心がけて、大切に使ふがよい。死後、閻魔の廳で舌を抜かれぬやう、御用心！御用心！

□月、きよき かももの川瀬の 夕風に
夏も流れて ゆくこゝろかな。

伴 信 友

二二の一五 一僧大雅を求む

◇清らかに、生活する者は、善き、生活をなすなり。「日本俚諺」

畫家池大雅が、江戸から奥州の方へ遊んでの歸途、或る禪寺へ立ち寄つて、午飯を乞ふと、折柄、住僧は、不在であつたけれど、留守の者が、快く、飯茶を振舞つてくれた。大雅は、禮心に、一偈を留めて、寺を辭した。

その後へ、住僧が歸つて、その偈を見ると、非常に感賞し、これが和を作つて大雅を追つたが、途中では逢はず、追ひ追つて、到頭、京迄來た。

そして、偈に『池無名』とあるのをあてに、そこへ、尋ねて見たけれど、誰れ一人、この名を知る者がない。尋ねた偈を、空しく歸らうとすると、宿の者が『切めて、東山だけでも御見物なされませ。』と勧めた。

『では……』と、先づ、祇園の社に詣で、繪馬殿に掲げた蘭亭の圖に、池無名の

三字があるのを見て、寺に就いて、初あて、その住居を知ることが出来た。

僧は、大に喜んで、早速、大雅を訪ひ、對面し終ると、

「今は、本意を遂げた。京に用はない。この儘、お暇致す。」とばかり、即日、發
促して、東へ歸つた。

伴齋蹊の評に、

一偈の爲めに、數百里を追ひて、事遂げて、復た他意なき洒落、いとも奇な
り。

所謂「洒落」は、心の用ひ方の、簡易、簡單なるの意である。この僧の如き
は、その簡單を極めた者といつてよい。

□ソロモンの、榮華の極みの時だにも、其の裝ひ、この花（百合花）
の、一つにも及がざりき。

キリス ト

二二の二六 蒲生の士よく敵を射る

◇飛びこんで、手にも溜まらぬ、霰かな。「富森春帆」

蒲生氏郷の士某、射を善くし、或る時の戦ひに、敵五人を斃して、首を氏郷に
献じた。氏郷は、切りに、その功を賞めて、

「何うしたら、然う無造作に、敵を射取ることが出来るか。秘訣があらう？」と
問うた。某は、

「秘訣とはござりませぬ。たゞ、敵の太刀先が、自分の左の腕に觸れると思ふ
刹那、切つて放せば、十人が十人、先づは、外れぬものでござりまする。」と答へ
た。

某が、敵に對した心得方は、直ちに、取つて、我々が、危険に對する法として

よい。

その法、要は、捨て身になるに在る。死生を忘れ、危険を忘れ、身を捨て切つて、危険に對する。この間、却つて、安全の道がある恐れて免れられる危険ならば、恐れるのもよい、逃げるのもよい、暴虎、馮河は、聖人の戒しめる所である。が、何としても、これに對し、これと戦はなければならぬ危険を前にして、びくびくものであるのは、偶ま以て、身を危くし、或ひは、命を失ふに足る。古人の語に、

死中に生を求む

とあるもの、思はなければならぬ。

□小事を、精密に觀察することは、職務に於ても、學問、藝術に於ても、

人生各般の事に於ても、功積を奏するものは、秘訣と云ふべし。

スマイルス

二二の一七 驢馬の乳

◇諸苦の因る所、貪慾を本と爲す。「法華經」

驢馬を知らぬ國の人たち、驢馬の乳の、旨くて、而も、滋養になる話を聞くと早速、相談の上、雄の驢馬を買つて來たさへあるに、我れ先にと争つて、頭を捉る者があれば、耳を引く者がある。脚を抱へる者、尾を掴む者、氣早に、バケツを持つて、駈けつける者、最も可怪しかつたのは、擧丸を乳房と思ひ誤まる者、奇つて集つて、驢馬をいぢくり廻したが、素より、乳の出やう筈はなく、あたら大金を棒にふつて、世の物笑ひになつた。

X

X

X

幸福——我々の欲する第一のものは、先づ以て、これであらう。これが爲めに慾心を熾んにして、何卒、名利の二つをと心がける。その心たるこの二つを目し

て、幸福の手段とするのである。

然るに、法華經には「諸苦の因る所、貪慾を本と爲す。」と見えてゐる。幸福を求め、名利を求め、慾心こそ、却つて、これ、苦痛の因であるといふのである。果して然らば、名利や、幸福の手段ではない。名利を通して、幸福を得やうとするのは、「木に據つて、魚を求む」(孟子)ると一般、將た、雄の驢馬から、乳を得やうとすると一般、その事、不可能に屬する。如何？

然り、名利は、幸福の手段ではない。名利を忘れ、幸福を欲しない無慾の地——たゞこゝにのみ、眞の幸福はある。

一一の二八 極樂の先裏

◇あるものの、なきこそ本の、すがたなれ。とは思へども、ぬる、袖かな。

「古歌」

「また一人、出でて曰く、某隣に、天魔屋の善兵衛とて、悟りきつたるをのこあり。其爲人、寝たいとき寝、起きたい時起き、喰ひたひとき食ひ、飲みたひ時、呑み、福をも悦はず、禍をも憂へとせず、生を樂します。死を惡まず、得失存亡を釣瓶にたとへ、苦樂、盛衰を確なりとて、貧富、貴賤をひと眼に見て、諂もなく、禮もなく、人譽むれども、榮とせず、人毀れども、辱とせず、此人寵愛の一子有りて、男子なりしが、十歳の春、急病にて相果てぬ。日頃は悟りきつたりとも、などか、力の落ちざらん、とおもひの外、憂ふる色なし我、問うて曰く、寵愛の一子に離れ、憂ふる色の見えざるは、如何。實に愁ふる心なきか。天魔屋、笑つて曰く、我、十年已前に子なし。其とき、何の憂へもなかりし、今また子なし、たゞ十年已前のごとし、又、何の憂ふる事のあらんやと、さつぱりとしたる顔色、是等は、係蹄を抜けたる人か。

翁の曰く、是等は係蹄を抜けて過ぎて、極樂の先裏へ行きし人なり。過ぎたるは、猶、及ばざるがごとし。

人の形有りて、人の情なし。人として人の情なきは、何をもつて人と云はん。

むかし、子を先だてし人のよみける歌とて、

有るものの、無きこそ本の、すがたなれ。とはおもへども、ぬる、袖かな。
是等の人情、味ふべし。予が隣にも足る事を知りたりとて、爲べき事をせず、
成るべき事をなさずして、貧乏を自慢する人有り、此類、また、世間に多し。是
等は、過ぎたる人か、及ばざる人か。翁も、高い聲はならぬ。あまり除いた中で
はない。(ありべかり)

X

X

X

下手に禪學をやると、往々、極樂の先裏へ行き過ぎる。

『生きた者の死ぬのは、當り前の事ぢや。泣いたとて、笑つたとて、二度と歸つ
て来るものもあるまい』とばかり親が死んでも、子が死んでも、猫の子の死ん
だ程にも思はない。莊子は、妻が死ぬと、盆を叩いて踊つたといふ。皆な、人情
に違つてゐる。

まことに、これ、人情である。親が死んで、泣き悲しむのは、死なない筈の人が
死んだからではない。死ぬのが當り前とは、よく死つてゐる。死んだ子を、呼び

返さうとして、泣くのではない。親しい者の死を悲しむのは、人情である。人情
の然らしむる所。己むに己まれずして、泣くのである。これ、自然である。
要は、その悲みが、度に過ぎて、爲めに、心を傷るに至らないに在る。孔子
曰く、

哀しんで、傷らず。

と、これであればよい。

悲しむのは、情である。情を制して、心を傷るに至らないのは、生死、無常の
理を知るからである。情と理とを兼ね存して、その人眞の人たるに近い。

吾等が、無慾を勧め、知足を説くのも。情理の二つを全くせんが爲めである。
無慾、決して、家業を放棄するの意ではない。知足、決して、貧乏を自慢するの
心ではない。名利の物に囚はれず。世外の情を以て、世内の事に當るのならば、
家業、出精すべしである。金銀、財寶、貯ふべしである。吾等は、たゞ、名利の
物に囚はるゝが爲めに、義理を忘れて、吝嗇に墮し、人情に背いて、貪慾を事と
する。世間多數の小人を厭ふのである。

一二の一九 日野資朝とむく犬

◇若きとき、學ばぬ悔いを、嘸みしむる、惠豊かなき迄、身は老いにけり。(日本俚諺)

大和、伏見、西大寺の靜念上人が、腰は弓、眉は雪、まことに、徳の高い有様で、内裏へ参るのを、西園寺公衡が見て、

「あゝ、貴い氣色ぢや！」と嘆じ、顔に、尊信の色さへ見えた。

すると、合せた日野資朝——これは、後ち、北條高時の爲めに、佐渡へ流され首を刎ねられた人、即ち、阿新の父である——は、笑止に思つて、

「あれは、年を老つたのでござる」といひ、後日、淺猿しく老いさらほひ、毛の抜け禿けたむく犬を贈つて、

「この犬、貴く見えまする。」と嘲つた。資朝は、公家に似ず、餘程氣象の鋭い人

であつたのである。

老いたるを父とせよ。「日本俚諺」

といふ。孔子も、

老者は、これを安んぜん。

といつてゐる。老人を尊敬し、同情、以て、これに對するのは、素より、その處であるが、公平に見て、世の老人は、たゞ、徒らに老いてゐる。生來、幾十年の久しきに亘つて、生計の途に奔走し、世の進連に貢獻した點から徒らに老いたとの評は、不當かも知れぬが、その精神状態を検すると、何の爲めの幾十年であつたか、一寸、疑問になる老人が多い。頭の倥傯は、少年の如くである。無智は依然たりである。徳性は、少しも、磨かれてゐない。老いるに連れて、愈よ強慾益す邪慳になつてゐるものもある。切めて、人に嫌はれる癖位は、除れてゐるやうなものであるが、事實は、その反對に行つてゐる。老人の大多數は、これである。一體、何うしたことであらう？

老人の自ら誇りとする所は、世故に老けてゐる、といふ一事に在る。多くの經

験を積んでゐる、といふ一點に在る。

龜の甲より、年の功。「日本俚諺」

と、人もいへば、自分もいふ。然し、老人の精神状態が、右の如きの有様であるのを見ると、あてにならないものは、経験である。

成程、経験の價値は大きい。けれど、學問の伴はない経験は、先づ以て、無價値に近い。孔子曰く、

學んで思はざれば罔し。

と。書を読み、師に就いて學ぶばかりで、これに反省、就慮を加へ、これを實地に経験するのでなければ、その學問は、たゞのお飾りになつてしまはう。けれど、

思つて學ばざれば殆し。「孔子」

で、たゞ考へ、たゞ経験するばかりでは、その考へが、獨斷に流れ、偏頗に墮し、固陋に陥つて、これ亦た、何にもなるものではない。

老人経験、年の功なるものは、恰度、これである。所謂る経験は、金を儲ける

こと、商賣をすることに就いての経験で、心を磨く學問をしてゐない。年の功を積む幾十年、依然として價値無一物なる所以、怪しむを要せぬ。

書を読むのみが、學問ではない。前に所謂る反省の二字、亦た、人間向上の大機會を成すものであるには相違ないが、さて、何を標準に反省するか。女は、鏡に照らして、顔を直す。何に照らして、心を直すか。女は、

人のふり見て、我がふり直せ。

といふ諺もあるが、そのみでは、恐らく足るまい。これを聖賢の遺訓に徴し、これを前人の言行に鑑みて、始めて、自ら修省することが出来る。勿論、人には良心といふものがあるが、その良心も、學問の砥にかけて、研磨を重ねた後にのみ、能く、光輝を發するので、生れた儘の人の良心は、曇つた鏡と一般、以て、我が身を照らすに足らぬ。

今一つ、他人の忠告がある。精神の修養上、最も大切なものは、この他人の忠告であるが、忠告といふもの、聞く者にも困難であり、いふ者にも困難である。忠告を忠告として受け取らず、自分を護るものとして、腹を立てる者が、十中の

八九に在る。自然、他人も、

「いつてやりたいが、怒られては詰らないから……」と、冷淡に差し控え、たゞ
陰で笑つてゐる——大概、これであるから困る。

斯くて、世の老人は、たゞ徒らに、老いてゐる。空しく、幾十年を過してゐる。
腰は弓、眉は雪、一見、高德なるけに見えて、その實、何等の取柄がない。「老い
た」といふことが、貴いのではない。老いたのが貴ければ、毛の抜け禿けた老犬
も、貴いのである。

斯くいふのは、決して、老人を侮るのではない。老いたる人を、我が父、我が
母とも見て、これに敬事するのは、人間の美德である。たゞ、世の老人の大部分
が、徒らに老いてゐるのを見る吾等は、後迄の少年、青年が、年尚ほ若きに及ん
で、大に、學問、修養の功を積み、多數老人の失敗を繰り返さざらんことを望む
のである。徒らに老いるならんことを祈るのである。然らざれば、他日、或ひ
は「若き時、學ばぬ悔いを、嘸みしむる、奥歯なき迄、身は老ひにけり」の嘆が
あらう。

世には、年を老るに従つて、次第に悪くなつて行く者がある。面皮は、段々、
厚くなる。奸智は、追々、増長す。嘘、偽りは、上手になる。ずるくなり、横着
になり、結局、

煮ても、焼いても、喰へない。「日本俚諺」

といふ、困り者になり果てる。これは、或る二三人の事ではない。放うて置け
ば、誰れでも、斯うである。些かの才や利巧を恃みにして、學問せず、修養せず
生れた儘に打ち捨て置けば、大概、然うなつてしまふ。孔子も、

君子は、上達し、小人は、下達す。

といつてゐる。そんなことで、六十、七十迄老いたとて、何の、貴からう？

論語に、

原壤、夷して俟つ。子曰く、幼にして、孫弟ならず、長じて、述ぶることな
く、老いて、死せざる、これを賊と爲すと。杖を以て、その脛を叩く。
うかうかしてゐると、聖人の杖に見舞はれなければならぬ。

二の二〇 證空上人悔ゆ

◇一と時雨、しぐれて後の、月見かな。「古句」

高野山の證空上人、或る時、馬に乗つて、京都へ上る途中、細道を通りかゝり、これも馬に乗つた女に出遇つた。所が、その口取りの男が、悪く馬を曳いて、上人の馬を堀へ落した。上人は、大に立腹して、

「これは、はや、稀有の狼籍ぢや。四部の弟子といふ者はな、比丘よりは比丘尼が劣り、比丘尼よりは、優婆塞が劣り、優婆塞よりは、優婆夷が劣る。然る賤しい優婆夷の身で、比丘を堀へ蹴入れさせるとは、古今未曾有の悪行ぢやぞ」と罵つた。口取りの男は、けろりとして、

「何を仰せられますやら、一向、わけが解りませぬ」といふ。上人は、尙も敦園

「何をいふか。非修非學の男め！」と、聲荒く喚いたものの、さて、氣がつくと法師の身として、これは又た、無性に放言したものである。自分ながら、氣恥づかしくなり、後悔の面もちで、馬を引き返し、すゞすと、逃げ去つた。

怒るのは、宜しくない。己むなく怒るならば、斯ういふ風に怒るがよい。忽ち怒つて、忽ち悔る、忽ち洒然としてしまふ——證空上人の如きは、怒るの善き者であつた。

豊太閤も、怒るの善き者で、これを譬ふれば、雷霆の連くや、暴房迅疾、天地、たゞ、崩れんことを恐る。而して雨紊れ、雲開けば、碧落一洗、未だ嘗つて、灑然たらずんばあらず。

「近古史談」

こんな風であつたといふ。彼の、長く、怒りを留めて、他日、報復の日あらんことを思ひ、自ら、心を苦しめる如きは、雷に、愚といふべきのみではなく、又た、女々しさの至りである。

二の二 盗人の泣つ面

◇鶴蜂の争ひ、漁夫の利となる。「戦國策」

二人の盗人が、一つの箱、一つの杖、一つの履を中に置いて、わいわい、いひ争つてゐる。通りかゝりの人が、

「何だ？ 汚らしい箱や杖位るに、目に角立て、騒ぐにも當るまいぢやないか。」

「否、然うは行かない。この箱は、金銀、衣類、望み次第の物を出す。この杖を揮れば、天下に敵する者はない。この履を穿けば、空中を飛ぶこと、心の儘だ。何れも、奇特の品だから、滅多には渡されない。」

「成程、仔細を聞けば、お前がたが、躍起となるのも、道理だ。では、俺が、いゝ魔梅に分けてやらう。」といふと、杖を揮つて、盗人共を追ひ拂ひ、箱を小脇に

して、履を穿いた。

「これ、何する？ 盗人め！」

「盗人の盗人呼ばりも面白い。騒ぐな、騒ぐな」といふ間にも、空を凌いで、見る見る、飛び去りながら、

「この三品があればこそ、貴様たちも、争ふのだ。今後は、仲よく暮されやう。泣くな、泣くな。」

×

×

×

親子争ひ、兄弟争ひ夫婦争ひ、朋友争ひ、凡そ、親しかるべき者程、よく争ふが、その争ひに依つて、利益を受ける者は、第三者である。誰れの爲めに争ふかと問はれた時、争ふ者の正しい答へは、他人を利せんが爲めに、といふに在らねばならぬ。

親子、他人を利せんが爲めに争ひ乃至、朋友、第三者を利せんが爲めに争ふ。愚、これより甚はだしきはあるまい。

一二の二三 天爵と人爵

◇古への學者は己れの爲めにし、今の學者は、人の爲めにす。『孔子』

『天爵なるものあり。人爵なるものあり。仁義、忠信、善を樂しんで、倦まざるは、これ天爵なり。公卿、大夫は、これ、人爵なり。古への人は、その天爵を脩めて、人爵、これに従ふ。今の人は、その天爵を脩めて、以て、人爵を要む。既に、人爵を得て、その天爵を棄つるは、惑へるの甚だしきものなり。終に、亦た必らず亡はんのみ。』孟子』

X X X

天爵があれば、人爵がある。人爵は、自然にして、天爵に従ふものである。孔子も、

學ぶや、祿、その中に在り。

といつて居る。學問、その功を卒へて、一廉の人爵になれば、その名も揚り、人にも用ひられ、求めずして、祿がある。祿は、求むべきものではない。人爵は求むべきものではない。

であるから、古への學者は、『仁義、忠信、善を樂しんで倦まず、以て、天爵を脩めることに専心一意し、公卿の、大夫のといふ、人爵には、一切、關心しなかつたものである。』

所が、今の學者は、人爵を得、祿にありつかんが爲めに、天爵を脩める。名利を目的の修養である。その仁義、その忠信、勿論、眞なるものではない。『善を樂しんで倦まずといつても、心からの事ではない。一旦、目的を達して、公卿、大夫の人爵を得れば、忽ち、その天爵を棄て、舊の小人に歸つてしまふ。』

孟子のこの語は、孔子が『古への學者は、己れの爲めにし、今の學者は、人の爲めにすといつたのと、略ほ、同じ意味である。人に用ひられて、俸祿を給せられんが爲めに學者するのが、所謂る、『人の爲めにす。』である。』

『今の學者』は、勿論、孔子時代の學者である。孟子時代の學者である。而も、

これ等の語に日本今日の學者の爲めにはれたかと思はれる。否、日本今日の學者は、尙ほ甚だしいものがある。彼等には、人爵を得んが爲めに、天爵を脩める、といふこともない。彼等の念頭には、てんで、天爵といふものがない。たゞ人爵があるばかり、祿があるばかり、高等官何等があるばかりである。報酬一點張りである。その心事たる、下駄屋の小僧が、下駄の製造を學び、酒屋の丁稚が、酒の扱ひ方を習ふのと、何等、變る所がない。斯くて、今の日本には、官界、民間、致る處に、學者はあるが、天爵を備へて「仁義、忠信、善を樂しんで倦ま」ず、といふやうな、大人物は、一人もない、藥にしたくもない。

二の二三 千代女尼さなる

◇花咲かぬ、身は静かなる柳かな。「乙山」

千代女は、加州松任の人である。初め、支考に従ひ、支考死して、美濃の盧元坊に學んだ。行脚の途次、松任へ來た盧元坊を、その旅宿に訪ひ、「時鳥」の題を課せられて、沈吟徹宵、

時鳥、時鳥とて、明しけり。

の一句に、入門を許された話は、有名である。始めて、夫に、見えた時、

澁かるか、知らねど柿の、初ちぎり。

愛兒を失つて、

蜻蛉つり、けふはどこまで、行つたやら。

伊勢の乙由へ遣はした手紙の端に、

花咲かぬ、身は狂よき、柳かな。

と書きつけて置くと、行き違つて、乙由の手紙が達いた。その端には、

花咲かぬ、身は静かなる、柳かな。

の句がある。千代女は、一見、

「自分と同案ぢやが「狂」の一字は「静」に及ばぬ。」と、深く嘆服した。その謙
遜さ、常に、斯くの如くであつた。

夫に後れて、尼となり。名を素園と改め、生涯を佛三昧に終つた。
尙ほ、千代女は、夙に、繪を越後の吳俊明に學んで、上手であつたと聞く。

X X X

所謂る、才媛なるものである。今の世にも、才媛はある。澤山ある、たゞ、そ
の浮薄な、高慢痴氣な様子に、うんざりさせられる。彼等は、千代女の謙退に於
て、大に學ぶの必要があらう。

「花咲かぬ、身は静なる、柳かな。」——或ひは、政黨の首領、幹部として、或ひ
は、實業界の大立物として、或ひは、大臣、局長として、或ひは、陸海軍の大
サーベルとして、華族として、富豪として、議員として、銀行、會社の頭取、社
長、重役として、世に時めき、花を咲かせてゐる人たちに較べると、吾等の生活
ぶりは、餘りに貧弱である。餘りにみじめである。が「花咲かぬ、身は静かなる
柳かな。」で、この間、亦た、吾等独自の樂地がある。吾等は、吾等の「静」を樂

しんで、決して、彼等を羨まない。

吾等の見る所、花と咲く彼等の生活は、恐らく、眞の生活ではない。名利の俗
物に取り巻かれて、己れ、亦た、名利を事とし、口に、國家、社會を談じて、實
は、一身の榮華をこれ願ひ、露、誠の心とはなくて、權謀を賢とし、術數を智
とし、そのいひ、その行ふ所、一として、虚偽ならぬはないもの、これが、彼等
の全生活である。彼等には、哲學もない。宗教もない。理想もない。趣味もない
彼等は、名利の奴隷である。彼等は、野心の團塊である。吾等は、最も、彼等を
厭ふ。彼等、或ひは、花であらう。それは、造り花である。天然の美麗、自然の
香氣の、以て、吾等の情を動かすに足るものがない。吾等は、彼等の生活の、羨
むべき理由を知らぬ。

彼等、猶ほ然り、況んや、彼等に從つて、そのお餘りを頂戴せんとする、末輩
蠢愚の輩をや、である。
思ふに、
人生、志に適するを貴ぶ。何ぞ、能く、官に數千里に羈して、名爵を求め

んや、「張翰」

といひ。

己れを屈して、富貴ならんよりは、志を抗けて、貧賤なるに如かず。「孔子」といひ。

豈に、能く、五斗米の爲めに、腹を屈して、故郷の小兒に見えんや。

「陶淵明」

といふの類、正に、高士の志でなければならぬ。莊子に、

莊子、濮水に釣す。楚王、大夫二人をして、往いて先たらしめて曰く、願はくば、竟内を以て累はさんと。莊子、竿を持ちて、顧みずして曰く、吾れ聞く、楚に神龜あり、死して既に三千年、王、巾笥して、これを廟堂の上に藏むと。この龜は、寧ろ、それ、死して、晋骨と爲りて、貴からんか。寧ろ、それ、生きて、尾を泥中に曳かんか。二大王曰く、寧ろ、生きて、尾を泥中に曳かん。莊子曰く、往け。吾れ、將に、尾を泥中に曳かんとす。これ、高士、静を樂しむの情である。

愚物の吾等、自ら、高士に比する程の已惚れはないが、高士、静を樂しむの情だけは、知つてゐる。世俗に交はつて、名利の途に奔走し、心を多方にして、騒がしく、忙しく日を送ることは、その忍び得ない所である。吾等も、静を樂しむ少くも、静の中に、己れの樂地を發見せんと欲する。

静は、虚である。虚は、老子の道、佛教の眞如である。空である。無である。我れなく、彼れなく、物なく、人なく、死なく、生なく、利なく、害なく、吉なく、凶なく、毀なく、譽なく、善なく、惡なく、すべてが、ないない盡しに歸すれば、

天地は、一指なり 萬物は、一馬なり。「莊子」
萬物一體、平等一如、何をか憂ひ、何をか樂しまん？

至樂は、樂なし。至譽は、譽なし。

所謂る、無樂の至樂こそ、静中の樂地、吾等の志の存する所である。

齡ひ、四十の坂を通り越して、家に擔石の儲へなく、近所の人、たゞ「變な阿爺」とばかり知る幸か、不幸か、儲ける金がないから、損をする金もなく、譽

められる名がないから、毀られる名もない。年中、大地震に遇つてゐるから、先頃のやうな騒ぎがあつても、一向、はや、驚く必要もなく、夏は一褐、冬は一裘、禪でゐる身には、盗人の虞れもなければ、土用干の世話もない。夜半に火事の半鐘を聞いても、體一つで逃げ出せば、後は、祝融氏が、よい鹽梅に焼いてくれやう、貸す人もなければ、晦日に頭痛鉢巻きも要らず。借る人もなければ、あるものをない顔して断る手敷もない。東京の片畔りに、蝸牛程の家を持つて、蚊の多いのと、水の悪いのと、溝板の腐つたのには、些か、閉口せぬでもないが、或る日、踏み折つて、片足を突つ込んだお蔭に大家も見かねて、直してくれた。誰れ訪ふ者もない荒屋に、八十に餘る老母を養ひ、頑是のない子供を育て、時々は家内に叱言もいつて、拙な原稿を書く暇々は、讀書と静思に日を送り、明日にも死ぬ迄は確かに生きてゐる吾等の貧乏生活こそ静かにも、又た、楽しけれである。

といつて、吾等、決して、山林隱遁の人を學ぶ者ではなく、世と人とを憂ふるに於て、必らずしも、人後に落つる者ぢないことを、告白して置く。私かに期す

らくは、世外の情を以て、世内の事に従はんことを。

一一二の二四 伊勢長氏の仁政

◇仁者は、敵なし。「孟子」

伊勢長氏、後の北條早雲は、初め、今川氏に寄食し、功を以て、駿河の惠國寺城に住ふことになる。政令を簡にし、民害を除き、租税を軽くし、農業を勧め、又だ、貯ふる所の金を出して、最も薄利に遠近に假貸し、屢ば來り調する者にはその債を免じなどした。毎月朔望、士民、相率ひて、長氏に調するの例であつたのである。斯くて、士民の、城下に移り住む者、漸く多く、稍や、聚落を成すに至つた。

時に、城下の民等、相謀つて、祠を吉原池畔に設け、長氏を祀つたといへば、德澤の深かつたことが、想像される。

一年、早越の事があつた。長氏は、金を大導師重時等六人に頒ち、適宜、民に賑給せ、且つ、

「當城主事、今は、異族ぢやけれど、實は、北條氏と申される。」と告げさせた。民の信望、彌増敦く、何れも、意を長氏に屬した。

北條早雲が、身を伊勵の素浪人に起して、終に、關東に堆視するに至つた所以は、仁慈の政、以て、民心を得たに在る。織田信長は、勇を以て與つた。豊臣秀吉は、智を以て與つた。徳川家康は、策を以て與つた。そして、早雲は、仁を以て與つた。仁者に抗し得る敵はない。早雲の後繼者をして、早雲に省、早雲の道を繼承せしめたならば、天下は、正しく、北條氏に歸すべくあつたのである。

一一の二五 机上から種蒔き

◇善人は、不善人の師なり「老子」

餘所の畑を見ると、麥が、青々として、如何にもよく、生へ茂つてゐる。主人に就いて、作り方を尋ねると、

「なるべく、畝を柔らかにして、種を蒔き、肥料を施す迄で、別に、手段も方法もない。」といふ。

乃で、此方は、考へた。

「足で踏めば、自然、畝が、固くなる。何とか、踏まない工夫はないか。」と思案の末、自分は、机の上に坐り、四人の僕に、それを昇かせて、種蒔きを終り、「これなら、大丈夫！ 今年は、きつと豊作だ。」と思ひの外、例年以上の大不作に、ひどく、悄氣返つた。

自分で踏まなくても、人に踏ませれば、結局、同じ事である。而も、自分の二足を嫌つて、人の八足に踏ませるに至つては、言語同断、お話にならない。自分で悪事をしなくても、人にさせれば、自分でしたも同然、同罪である。一人の一言一行は、必らず、他人に影響し、善にまれ、惡にまれ、これに感化

を及ぼさずには置かぬ。人に悪感化を及ぼすのは、人に悪事をさせるのである。人の悪事は、人の悪事たるのみではない。自分にも、責任がある。榮耀榮華に日を送る貴族、富豪は、天下に奢侈、贅澤を教へて、青年の進路を誤らせ、往々これな犯罪にさへ導く。その罪、甚はだ、軽くはない。我々は、人に悪感化を及ぼさないやう、自ら戒しめ悖しむは勿論、更に進んでは、これに良感化を及ぼし、老子の所謂、「不善人の師」たるべく、大に修省しなければならぬ。

一一の二六 久米の仙人通を失ふ

◇天に克ち、天に従へ。「ミル」

世の人の心惑はすこと、色慾には如かず。
人の心は、愚なるものかな、香氣などは、假のものなるに、しばらく、衣裳に

たきものすと知りながら、得ならぬにほひには、必ず、心ときめまするものなり。
久米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、誠に、手足、肌なんどの、清らに肥え、あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。「徒然草」

人の男女の慾があるのは、自然である。將た、この慾があればこそ、人類は繁殖する。國家も、社會も、この慾に根柢するものとも見られる。佛教などで、これを罪惡視するのは、間違つてゐる。たゞ、それが、自然であり、人性であるだけに、力が強い。この慾の爲めに、久米仙同様に失脚する者は、甚はだ、少くない。久米仙は、通を失つた。一般には、金を失ひ、家を失ひ、志を失ひ、道を失ひ、義理を失ひ、人情を失ひ、果ては、身を失ふ。恐ろしいのは、この慾である。これを戒しめ、これを制し、これをして、人生の過害たるに至らざらしむるやう、篤と、注意しなければならぬ。人に賦するに、この慾を以てした自然は、

併せ賦するに、この慾を調節するに足る所の意志を以てした、又た以て、自然の企圖を察することが出来る。

自然には、従はなければならぬ。それは、自動的に従ふのである。他動的に――引き摺られて従ふのは、禽獸の事である。意志あり、人格ある人間の爲ではない。

二二の二七 元就と元儒臣某

◇諂諛は、嘗つて、惡徳であつたが、今は、一般に流行する。

「パプリアス、サイラス」

毛利元就は、英明の主であつた。或る時、儒臣の某が、
「領内の民共は、君を甚はだ徳として、湯武の世も及ぶまいと、斯やうに申してをりまする。」と、おべつかを呈した。元就は、苦り切つて、

「及びもつかぬ事！ 自分は、恥かしく思つてをる。」

「何故でござりまする？」

「湯武の世には、お前のやうな諛ひ者はなかつた。」との言葉に、某は、赤面して恥ぢ入つた。

男子の諸行爲、その最も醜いもの一つは、諂諛である。おべつかである。男子、賣笑婦を真似てはならぬ。賣笑婦は、客の懷ろを狙つて、世辭をいふ。世渡り上手は、人の勸心を得んが爲めに、阿諛を用ひる。賣笑婦の事など、問題にならないが、堂々五尺の大男子を以て、他人のお髯の塵を拂ふこと、自ら顧みて、恥づかしくはないか。

諂諛は、番に、醜いといふのみではない。これ、自ら欺き、併せて、他を欺くのである。相手を傲慢ならしめるのである。非を遂げ惡を成さしめるのである。過ちを重ねしめるのである。財布の紐を解かせ、結局、身上を棒に揮らせるのである。その不親切、不誠意は、悪んでも餘りがある。

それは、不親切である。不誠意である。而も、一應、親切のやうに見え、誠意のやうに受け取られる所に、諂諛の恐るべき理由がある。諂諛と知りつゝ、聞いて心持ちの好いものは、諂諛であるといふ。況んや、諂諛と知らずに聞けば、その嬉しさは一入で、到頭、諂ひ者に誑されてしまひ、その捕虜になつてしまふ。捕虜の身に、自由はない。萬事、その者のいひなり次第で、金も出う。馬鹿も盡さう、といふことになる。世に、諂諛程恐るべきものはない。

諂諛の害に罹る者は、貧賤の人よりも、富貴の人に多い。甘い物には、蟻が寄る。富貴の門には、小人が集まる。集まるのは、何れ、爲めにする所があるのである。乃はち、得意の小智慧を出して、こゝを先途と、おべつかを呈する。うつかりすると、その良にかゝつてしまふが、富貴の人には、うつかり者が多い。實以て、險呑々々。

されば、今の世には、諂諛が流行る。信義を趣意とすべき朋友同士すらが、互ひに、お世辭を列べ合つてゐる。善を責むるは、朋友の道なり。

と聞くが、今の世、善を責め合ひ、忠告し合ひ、以て、各自の徳を高くしやうとする朋友はない、人間が、利巧になつたのか、利巧さうな馬鹿になつたのである。

一二の二八 酒を強ふる事

◇一杯、人、酒を飲み、二杯、酒、酒を飲み、三杯、酒、人を飲む。「日本俚諺」

世には、心得ぬ事の多きなり。ともある毎には、先づ、酒を進めて、強ひ飲ませたるを興とする事、如何なる敵とも心得ず。飲む人の顔、いと堪へ難けに、眉顰め、人目を計り、棄てんとし、逃げんとするのを捕へて引き留めて、漫ろに飲ませつれば、美はしき人も、忽ちに狂人となりて、烏滸がましく、息災なる人も目前に大事の病者となりて、前後も知らず、倒れ臥す。祝ふべき日などは浅猿しかりぬべし。明くる日迄、頭痛く、物食はず、によび臥し、生を隔てたるやうに

して、昨日の事覚え、公、私の大事を缺きて、煩びとなる。人をして、斯かる目を見する事、慈悲もなく、禮儀に背けり。斯く、辛き目に遇ひたらん人、妬く口惜しく思はざんや。他の國に斯かる習ひあんなりと、これ等になき人事にて、傳へ聞きたらんは、怪しく不思議に覺えぬべし。『徒然草』

酒を強ひるといふ事、眞實、不思議な習慣ではある。これを禮とするに至つては、益す不思議である。

この不思議な習慣は、どこから起つたか。日本人には、他で響應された時など食ひたい肴も食はず、飲みたい酒も飲まず、ちつと我慢して、それを謙遜と心得る癖がある。偽善といふか。虚飾といふか。要するに、無邪氣でない。この無邪氣でないといふ事、恐らく、酒を強ひるといふ、不思議な習慣の原因であらう。果して然らば、強ひる者、勿論、宜しくないが、強ひられる者にも、罪があるのである。

一一の二九 太閤欺きを容る

◇人、察なれば、徒なし。『荀子』

豊太閤秀吉、或る時、山城山里に一小墅を設け、軒前へ五六本の松を植えた。すると、留守居の茶坊主梅松といふが、聚樂の臺へ松茸を持ち込んで、

「これは、別莊の松に生へたのでござりまする。」と、献上に及んだ。太閤は、笑ひながら、

「何、自分の威光で、僅に數個月の間に、松茸が生へたか。偉い！ 偉い！」と満足げに受け取つた。

梅松は、少からず、面目を施した心持ちで、その後も屢ば、献上した太閤は、笑ひながら、

「止めよ、止めよ。そんなに松茸を生やすのは、甚はだ、宜しくない。別墅で獲

れた松茸ではなく、梅松の奴、他で買ひ取つて、そんな嬉しからせをいふといふことは最初から、太閤に判つてゐたのである。

人を欺くのは、勿論、悪いに定まつてゐる。けれど、人に欺かれるのを嫌つて一々、人のいふ事、する事に疑ひを挟み明細に糺し、綿密に調べ、一分一厘、間違ない所を得て、初めて、安心してやうとする行き方は、厭ふべきに屬する。荀子の語に「人、察なれば、徒なし」とあつて、餘り、嚴密に過ぎると、人が、寄りつかなくなる。老子にも、

その政、察々たれば、その民、缺々たり。
と見え、所謂苛察は、徒らに、民を苦しめ、衆望を失ふに終る。諺に、
水、清ければ、魚棲まず。

といふのも、この事である。白河樂翁公が、田沼父子弊政の後を承けて、寛政の政革を行つた時、
白河の清きに魚の、棲みかねて、もとの田沼の、泥ぞ戀ひしき。

の落首があつたといふ。亦た以て、民意の在る所を知ることが出来る。
といふのが、事には、程度がある。五分も隙さぬやり方よりも、大した害のない限りは、人の欺きを容れ、以て、多少の餘裕を存するのが、長者の長者たる所以である。斯くてこそ、人は、喜んで、その人の下流に出るであらう。
豊太閤は、よく、欺きを容れた、人に長たる資格を具へてゐた所は、流石である。

二三〇 丘吾子外に投ず

◇孝弟は、それ、仁を爲すの本か。「有子」

或る時、孔子が、齊へ行かうとすると、途中で、人の哭声が聞えた。その聲が、まことに、悲しげである。孔子は、自分の僕に向つて、
「悲しげではあるが、喪の者の悲みではないらしい。」といひながら、尙も、馬を

驅つて行くと、録を持ち、繩を帯にした、異體の人を發見して、相變らず、哭いてゐる。

乃で、孔子は、車を下り、その人を追うて、

「其許は、何方でござる？」と、問うた。

「手前は、丘吾子と申す。」との答へ。

「今、裏があるわけではない。何故、そんなに哭かれるか。」

「手前には、三つの過ちがござる。覺りやうが晚かつたので、最早、悔いても、

及び申さぬ。」

「三つの過ちといはれるのは？」孔子が、問ひ詰めると、丘吾子は、慨然として

いふのであつた。

「手前は、若い頃、學問が好きで、天下を周遊致したが、後ち、還ると直ぐ、親を喪ひ申した。これが、過ちの第一でござる。成長して、齊の君に事へた所、君は、驕奢を事として、士を失ふ、自然、手前も、臣たる道を盡さずに終つた。これが過ちの第二でござる。手前は、平生、交りを厚く致したに關はらず、今では

皆な、離絶致してござる。これ、過ちの第三でござる。樹が、靜まらうとしても風は、停まぬ。子が養はうとしても、親は、待たぬ。往いて來ぬものは、年でござる。再び見られないものは、親でござる。では、これにてお別れ申す。」といふと、忽ち、水に抗じて死んだ。

孔子は、弟子たちを顧みて、

「皆の者も、よく、記憶せよ。今の丘吾子の事は、まことに、善い戒めぢや。」と語つた。弟子等の感動も、亦た異常で、遠く、故郷の事を思ひ出し、辭し歸つて親を養ふ者が、十有三人の多きに上つた。

X

X

X

狭義に解せられた道徳は、人と人との關係を規定するものである。この意味に於ける道徳の根柢は、人間本具の他愛心に在つて、吾等の見る所、他愛心の根本なるものは、種族保存の本能をそれとするから、畢竟して、道徳の根柢は、種族本能に在るとしなければならぬ。

種族本能は、親のその子に對する愛情に於て、最も痛切に露はれる。古語に、

哀々たる父母、我れを生んで劬勞す。哀々たる父母、我れを生んで勞瘁す。とあるが、這般の愛情は、獨り、人間のみのものではない。鳥や獸が、その子に對する心持ちも、亦た、人間と變りがない。

燒野の雉子、夜の鶴。

といふ諺もある。それが、動物通有の本能であるからである。

であるから、親のその子に對する種族本能——その痛切なる愛情を取つて、廣く世間の人に及ぼせば、それが、直ちに、道德である。親の愛、親の情こそ、道德の本——有子の所謂「仁を爲すの本」でなければならぬが、有子は、此れを措いて、彼れを取り、

その人と爲りや、孝弟にして、上を犯すことを好む者は鮮し、上を犯すことを好まずして、亂を作すことを好む者は、未だ、これあらざるなり。君子は本を務む。本立ちて、道生ず。孝弟なるものは、それ、仁を爲すの本か。といつて、孝弟を目して、道德の本として居る。これは、何うした理由か。それには、大に、理由がある。親のその子に於けるは、その關係が、極めて密

切で殆んど、一體不二の觀がある。二人といふよりも、寧ろ、一人に近い。親のその子、見る眼は、猶ほ、自分を見るが如くで、その愛情も、これを他愛といつてよいか、自愛といつてよいか、見方次第、一寸、判断に苦しむ。道德が、人と人との關係を規定するものであるならば、親とその子に於ける關係は、道德の範圍外に在るやうにも考へられる。有子が、道德の本として、親の愛を取らなかつた理由の一つは、こゝに在る。

道德は、その本源と、その理想との、二方面から觀察される。道德の理想といふ方面から見ると、道德の道德たる所以は、それが、本能とか、天性とかいふものと、相逆行するの邊に在るとしてよい。カントの見方は、最も、それで彼れの嚴肅主義は、極端に、本能や天性を排斥したものである。それは、間違つて居る道德は、本能を本源とし、本能から出發して、本能以上の理想に迄發達したものである。自然に従つて、而も、自然に打ち克つのが、我々人間の全生活である。天に従ひ、天に克て。

といふミルの語を、吾等は、斯くの如くに解釋したい。

さばれ、道徳は、一應、本能と相逆行するものである。有子が、本能そのものなる親の愛を取らなかつた理由の二つは、こゝに在る。

轉じて、子の親に對する孝、弟の兄に對する弟を見るに、これ亦た、種既本能に由るものであるには相違ないが、その痛切の度は、親の子に於ける愛の如くではない。又た、その關係は、明かに、人と人との關係である。道徳の二方面の一なる理想の分子が、多分に包含されて居る。親の愛が、一見、道徳の範圍外に在るやうに思はれるのは異なつて、孝や弟は、瞭然として、道徳の範圍内に在る。即ち、この二つ——孝弟は、一般に、道徳の道徳たる所以とする所の、理想的分子を包含することは、他の論徳と同斷であるが、道徳の本源たる本能の分子を包含するに至つては、他の諸徳の上にある。目して以て、道徳の最も根本的なものとするとするのは、恐らく、差支がないのであらう。これ、親の愛を差し措いた有子が、親の愛に最も近い孝弟を取つて、『仁を爲すの本』に即ち、道徳の本とした理由の最大なるものであらう。

弟の事は、姑らく措く。孝が、道徳の本たることに就いては、孝經にも、

孝は、百行の本、教への由つて生ずる所なり。

と見え、古今の定論、何人もの異存のない所である。而も、その、大部分、人間の本能に屬するに於て、何人にも、行ひ易かるべき筈である。會つて、一字を學ばずして、その親に事ふるに至つては、能く、聖賢の者に叶ひ、世の讀書子をして、愧死せしめんとする者が、昔から、數多ある。孝が、人間の本能であつて従つて、行ふに易い證據である。世間、不孝の子の多いは、何うした事か。人、若し、孝の徳を缺くならば、他の萬行は、見るに足らぬ。忠臣、義士に似た行ひがあり、志士、仁人に似た爲があらうとも、それは、たゞ、『似た』である。『似て非なるもの』である。偽善である。『本立つて、道生ず。』——孝弟の本が立たないで、萬行の事のあらうわけがない。

□比叡の山 見わたす方で あはれなる

けふ九重のかずしたらねば。

蒲生君平

二二の三一 フランクリンの十二徳目

◇空言を以て、教ふるは、實行を以て、教ふるに如かず「スマイルス」

- 一、節制——餘分に飯食すべからず、
- 二、沈黙——自他の益にならざる事を辨ずる勿れ。無益の談話を避けよ。
- 三、整濟——所有の物品は、各その置場所を定め、豫定の仕事は、悉く時間を設くべし。
- 四、決斷——己の職業は、勉めてこれを爲さんと決心せざるべからず。既に決心したる事は、遲滯なく之を爲さざるべからず。
- 五、儉約——自他の利益にならざる事に金錢を費すべからず。一物たりとも、これを徒費すべからず。
- 六、勉強——時間を空しく経過すべからず。常に有用の事にのみ使用すべし。

- 七、眞實——悪しき詐欺を爲すべからず。正直に考へ眞實に話せ。
- 八、正直——不正の所業を行ひ、或は自己の職分を怠りて、他人に損害を與ふべからず。
- 九、抑制——すべて極端の事を爲すべからず。不正の所業を増長せしむべからず。

- 一〇、靜肅——小事に驚くべからず。免かるべからざる災難に出遇ひたる時は、虚心平氣となりて、決してその志を亂すべからず。
 - 一一、清潔——身體、衣服、居室を不潔ならしむべからず。
 - 一二、仁愛——自身の平和を完ふすべし。他人の名譽を毀損すべからず。
- 以上は、フランクリンの、自警の十二徳目である。フランクリンは、この、十二徳目を念々刻々に、これを忘れず、絶えず、これを標的とし、以て、修養の功を積んだのである各條、すべて卑近である。卑近であるだけに、適切である。

修養の道は、坂に車を押すが如くである。急いではならぬが、といつて、休んではならぬ。休めば、必ず後へ戻る。即ち何事にも「絶えず」といふことが肝要である。絶えず、法義を聴き、絶えず、書物を読み、絶えず、精神の修養に力むれば、日進月歩、必ず大に得る所がある。一時限りの讀書、一時限りの工夫、一時限りの修養に、何の効果があるものではない。所謂、孔子の、『死して、後ち、已む。』の覺悟があり、久しきに亘つて、不斷に修省し、一心に工夫してのみ、能く、その目的を達成することが出来るのである。

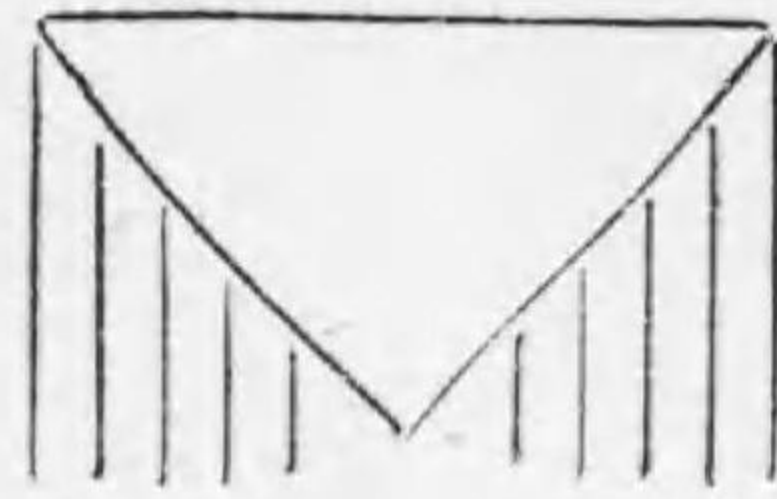
一日修養の泉終

大正十三年九月十日印刷
大正十三年九月廿日發行

◇修養の泉◇

【定價金貳圓五拾錢】

▷製複許不◁



著者 山田至人
東京市麹町區飯田町六丁目廿一番地
發行者 田原 晴
東京市京橋區本湊町十三番地
印刷者 牧口駒三郎

發行所

東京市麹町區飯田町六の廿一
電話四谷六一四一番
振替東京四六三九三番

文武書院

291
805



終

